

第二期 第五十九号 (初版) (無料)

# 音信不通

本のビオトープ

2021. 06. 20 定有堂書店 発行

## 閉塞と覚醒

汽水のほとりから (3)

贗作・三屋清左衛門残日記

帆、あげっぱなし日記

本の差し入れ

ケアとセラピーをめぐる III

学びは伝染する〜学び祭生徒感想一覧

小川軒と市勘の思い出 上

八代日記 (十五)

実在しない実在の場所

鳥取あれこれ その五十八

不条理のメルヒェン 續

「嫌悪」の向こう側

みかんの缶詰

アップルパイ

奈良 敏行

小原 修治

萩原 俊郎

鳥居 貴彦

吉田 海将

松田 裕史

芝野 浩貴

古賀 啓三

齊藤 仁昭

ムラカミヒロミ

内田 克彦

秦阜 梅林

三浦 永理

あきの素生

ドラマリア

編集後記

## 閉塞と覚醒

奈良 敏行

(定有堂 店主)

このところ、唯名論と、それに対立する概念に、興味を引かれている。言葉は必ずしも対応する実体を持っていない、そうだろうか、というようなことがらのはなしだ。「覚醒」というのは、概念(言葉)が、暮らしの中に侵入してくる事態を示す。停滞、足踏みが久しくつづく。日々が単調になったということだ。本を読む時間がおのずと増える。こんなとき酒屋であれば酒に耽溺するのもかもしれない。本屋であれば書物に耽溺するのが自然なことかもしれない。ここでなぜ「覚醒」という言葉を用いるかというと、本屋の棚にある、『中世の覚醒』という書物が、以前から気になっていたからだ。この覚醒もどうやら書物への耽溺にはじまるものであったらしい。アリストテレス哲学が十二世紀に、アラビア経由でキリスト教世界に伝わってきたときに、書物に始まる衝撃が訪れる。それが「覚醒」の内実だ。本のある暮らし、というテーマで考えている人に出会った。定有堂教室「読む会」の仲間だ。普通に考えれば、本を

読む楽しさに満たされた、日常ということだろう。適度な読書は健全なことだ。しかしその量が域を超えると、普遍的に、書物が現実の体験となってくる。少しヘンだがこれも覚醒といえる。権利上存在しうるものが、顕在化することこそが、「覚醒」ではないだろうか。

最近読んでいた本の中で、「遊牧民は決して旅立たない。旅は定住民のすることである」という言葉に、出合った。こんな精神をノマディズムというようだ。反語に富んだ言葉のもつ文脈的拘束力が、ここでは小気味よい。わたしは旅立つことは好きではない。日常の輪郭があいまいとなり、自己崩壊に引きずり込まれそうになるからだ。要するに旅に出たくないだけなのだが、「決して旅立たない」というノマディズムの大きな物語に自分を重ねると、何か心安らかになるものがある。

旅立たないために書物を手放さないのだろうか。きつとそうだと思う。何かを見ないために何かをする。読書もそんな構造を持っている。ペスト・パンデミックの現実を見ないために、フイレンツェ郊外に引きこもって、退屈のぎに物語を披露しあう、『デカメロン』という本に目を通した。持ち回りの話も、十日とつづき数多いのだが、なんとなく苦難を機転でのりこえた、というパターンが印象に残る。ここでは「語り」だが、本を読んだりしてやり過ご

しても、いつかは外部に平和が訪れる。しかし本当だろうか。エドガー・アラン・ポーの作品に、『赤死病の仮面』がある。出血死する、赤死病と呼ばれた疫病が、まん延する中、城砦に閉じこもり、宴に浸る貴族たちの中に、ある日仮面の男がまぎれ込む。一瞬のうちに全員が感染し、死に絶える。長くつづく宴と、一瞬の終焉というのが、おそろしい。

ところでノマディズムというのは、現実対応に身をまかせて行為するのではなく、観念性のひそみに身を委ねることでもある。移動を常とするわけだから、身を任せるほどのたしかな現実はそのにない。あらかじめ確固とした現実を思い描き、外界に投影していくしかない。荒地地での覚醒の形態だろうか。ここ一年余の閉塞の中、現実が与えてくれる豊かさは遠のいていく。幸い書物は補うようなかたちで現実味を提供してくれる。書物の中には、概念や観念が、豊かに埋もれている。現実そのものではないが、現実を補完するものを、独特の仕方と与えてくれる。そこで、言葉は、唯名論的なあり方ではなく、普遍的なありようとなる。書物のノマディズムに思いをはせる。しかしふとした隙に、現実が仮面をかぶって立ち現れるかもしれない。逃げ切れるだろうか。それが問題だ。

書物は、概念的な内容のものや感性的なものや、数多

いろいろな種類がある。閉塞的だが、移り変わることをやめない季節がめぐり、日々読書という行為だけが時を刻む中で、ふと心引かれる和歌に想いを重ねてみた。こころの屈折が、概念的な読みへと道筋をはこんでしまっ。

春ごとに花のさかりはありなめどあひ見むことはいのちなりけり

覚醒するものは、そのような「いのち」なのかもしれない。

2021. 05. 17

(参考)

リチャード・E. ルーベンスティン『中世の覚醒』ちくま学芸文庫 2018

船木亨『ドゥルーズ』清水書院 2010

ボツカッチョ『デカメロン上中下』河出文庫 2017

エドガー・アラン・ポー「赤死病の仮面」『ポー傑作集』中公文庫 2019

小町谷照彦『古今和歌集』ちくま学芸文庫 2010

太極拳教室（会場 定有堂二階 葉香クラブ（荷葉）

毎週 水曜 十九時半から ・土曜 十三時半から

講師 日本武術太極拳連盟 四段 公認A級指導員

定有堂教室「読む会」（岩田直樹氏 選書）

毎月一回 火曜日 詳細は店内掲示

# 汽水のほとりから (3)

小原 修治

(県立高校教諭 湯梨浜町松崎在住)

世界妄想学会という風変わりな名称の会が県内にあるのをご存知だろうか。四年前、養老孟司をゲストに迎えて米子で学会設立の記念講演会が開催されている。あいにく足を運べなかったが、一昨年春に開かれた二度目の会には参加することができた。この時の記念講演会は中沢新一。古代出雲からホモサピエンスの流動的知性へと至る話は実に興味深く、警咳に接したことでそれまで敬遠してきた彼の本をぼちぼち読み始めたが、半年後、新刊『レンマ学』（講談社）が出るに及んで、すっかり魅了されてしまった。

こんな話を持ち出したのは、つい先日定有堂で購入した彼の最新刊『アースダイバー 神社編』（講談社）が期待に違わず面白かったからだ。とりわけ「海のゾミア」仮説には興奮させられた。著者によれば、縄文人にかなり遅れて日本列島へ移り住んだ弥生人は、もとは南中国の揚子江河口辺りを本拠とした海洋性民族で、今は中国南西部の山中

に暮らす少数民族と同じルーツを持つ人々だそうだ。倭人・倭族という民族概念で総称されるこれらの人々は、縄文人が知らない二つのイノベーションに関する新知識を持っていた。「水田による稲作」と「国家」とがそれで、前者はまもなく日本列島にもたらされたが、後者は長らくもたらされることはなかった。なぜならば、彼らは「国家」の存在は知っていても、むしろそれを忌避して集団で海を渡ってきた人々だったからである。大陸では、既に国家が誕生していた。「海のゾミア」とは、そこから逃れる為に日本へ移住してきた倭人・倭族⇨弥生人を指すのである。「ゾミア」の語は、東南アジア大陸の五か国（ベトナム・カンボジア・ラオス・タイ・ビルマ）と中国の四省（雲南・貴州・広西・四川）を含む広大な丘陵地帯を指す地理学上の新名称で、「高地民」を表す言葉に由来する（「ゾ」は奥地または山地での暮らしを、「ミア」は人々を意味する）。ところが、八年前に翻訳が出た『ゾミア 脱国家の世界史』（みすず書房）において著書ジェームズ・C・スコットは、この語を「ゾミア」の地理的特性を利用して国家に抗する社会を営み続けてきた人々を意味する新たな概念として使用した（原題の直訳は、『統治されないでいる技術』）。その実態は、標高三百メートル以上の丘陵地域に暮らす、多種多様な言語をもつ計一億人にのぼる少数民族である。

彼らは消極的に言えば国家に追いやられてきた人々だが、積極的に言えば国家に組み込まれるのを拒み続けてきた人々である。「海のゾミア」とは、彼らが自ら進んで山中の奥地へと移住したように、倭人・倭族と呼ばれる人々が自ら進んで海中の島嶼へと渡来してきたことを意味する。日本のオリジナリティー（まさにオリジンとしてのそれ）を考える上で、これは実に魅力的な仮説ではあるまいか。

なお、「ゾミア」を初めて学術用語として用いたファン・スヘンデルは、これをアフガニスタンまでも含む広大な地域を指すものと考えていた。確かに中村哲の著作を読むと、アフガニスタンの山岳地帯は、ヒンドウクツシュ山脈とその支脈の分断により著しい割拠性を帯び、世界最大の部族社会だと書いてある。アフガニスタンとはアフガン人の土地という意味だが、アフガン以外の部族が山のようにいて、彼らは独自の言語をもって自立しているのだから、これも「ゾミア」ではあろう。この辺りは無政府状態で、オサマ・ビン・ラディンとその側近が潜伏したのも故あることなのだ。あるいは、この国の人々の為に一生を捧げた中村哲もまた、同調圧力の強い日本とは異なる、独立自尊の精神に富む国柄を愛した一人だと言えるかもしれない。

「ゾミア」とは、反国家的でアナキーな概念である。実際そこでは国家のような租税賦役の義務は無く、首長を

いたたく階層性はあっても平等型社会を実現していた。が、それもそう長くは続くまいとスコットは述べている。第二次大戦以降、鉄道・舗装道路・航空機・電話・電報・デジタル通信といった科学技術が国家によつて整備され、それが「ゾミア」と国家との間にあつた勢力均衡を根本的に変革し、距離という障壁を縮めてしまったからである。グローバル化した現在、こうした事態は更に進んでいる。昔中国では人民を管理する為に戸籍が発明されたが、今や個人に関するデータさえ日々集積し得る。専制国家として長い伝統を有する中国において、統治に資する技術革新が国家主導のもと世界最速で進められているという事実は、歴史的にみて平仄があう。一方、そんな中国であればこそ、国家の支配から逃れた人々が暮らす場所が世界の何処かに存在することが夢想されてもきた。陶淵明が「桃花源記」で描いた桃源郷はその代表だが、まさにそれは心の中の「ゾミア」であつたと言えよう。スコットが言うように、「ゾミア」は徐々に地上から消えてゆくとしても、それは人間の心からは消えず、その精神は回帰し続けるだろう。

## 贋作・三屋清左衛門残日録

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

昔、古い借家に住んだのがたたってか、三十年來の喘息患者（コロナのワクチン接種で優先される基礎疾患）である。八年前にカミさんに先立たれた直後から、発作は不思議になくなった。「奥さんがあなたの病氣をもって天国に行ったのですよ」と周りはいまいことを言うが、完治する病氣でもない。用心して吸入薬を三カ月に一度、近くの病院にもらいに行っている。

主治医のH先生とも、すでに四半世紀近い付き合いだ。近況を問われ、「退職して隠居の日々ですが、時折、頼まれた仕事や後輩の相談事に乗る日々です」と話すと、「まるで『三屋清左衛門残日録』の生活ですね。うらやましい」と言われた。はて、「三屋清左衛門残日録」…。

「日残りて昏（く）るるに未だ遠し」。仲代達也のセリフがよみがえった。昔、NHKで毎回楽しみに観た記憶がある。時代小説とは無縁の人生だったが、市民図書館で初めて藤沢周平全集を探し、読もうという気になった。

◇ ◇ ◇  
幕藩時代を描いた藤沢周平の時代小説を、社内の派閥争いや出世競争になぞらえて愛読するサラリーマンは少なくないという。そういえば、構造的に幕藩体制（お家が大事）と現代日本の企業体質は、情けないことにあまり変わっていない。さて、そういうわけで書いてみた。パステイシュー（贋作）三ツ屋清左衛門残日録。

◇ ◇ ◇  
三屋清左衛門の江戸屋敷詰めも二年半になろうかという頃、藩主が久々に江戸にお成りというので、若い近習方や奥女中も加えてささやかな宴席を催した。

酒で顔を上気させた藩主は「もちつと近う寄せ。そちに頼みごとがある」と清左衛門を手招きした。

こういう時はろくなことがない、と清左衛門は半ば覚悟しながら盃を手の上座に赴いたが、やはり予感的中した。「しばらく上方に行つてもらえぬか。そちの仕事ぶりや気性を見込んでのことだ」。近習方や奥女中から、静かなざわめきが広がった。

かつて清左衛門は上方で大鉈を振るったことがある。先代の藩主は米相場の高騰をみて、藩の御蔵米を市場より安価で売れば利益を得られる、と上方に巨大な運用蔵を設けたが、目論見は外れ、毎年数千両の損失が生じていた。

「このままでは藩が潰れる」。当時、運用米の勘定奉行だった清左衛門は上方に単身乗り込み、蔵の大半を閉鎖した。先代藩主の取り巻きの家老たちは「大殿に唾するもの」と怒ったが、栓無きことである。藩にとつて何千両もの無駄金を解決したのだから、褒められこそすれ、咎められる筋合いはない。清左衛門は気にも留めなかつたが、突如、江戸屋敷詰めが命じられた。

周りは「江戸詰めのご栄達、おめでとうございます」と喜んだが、そんなことでないことは清左衛門自身が一番知っている。

宴もお開きとなり、藩主の申し出に「分かり申した」と清左衛門は答えた。国元には病で亡くなった先妻の後添いにもらった幼馴染の妻女がいる。その晩のうちに「すまないが、まだ帰られぬ。江戸の次は上方、と殿から仰せつかった。わが身から出た錆とあきらめ候」という手紙をしたためた。

◇ ◇ ◇  
ところが一週間後、国元から届いた通達は意外なものだった。「国元に帰り、右筆方の参与を務めよ」。

国元に帰れる。しかし右筆方とは藩の公文書や手紙を扱う裏方で、しかも参与は初めて聞く役職名だった。清左衛門は藩主に「ずいぶん、お話が違うではありませんか」

と早や文を送った。すると藩主からは「実はこたびの件、7 われは全くあずかり知らぬもの」という答が返ってきた。清左衛門は愕然とした。藩主も知らぬ人事とは。

その時、清左衛門の脳裏に、先代藩主の取り巻き連中の顔が浮かび、「どこまで殿をないがしろにするつもりか」と怒りがこみ上げた。いや…ひよっとすると。

改革を急ぐ藩主が「清左衛門を上方に送り込む」などと不用意に仄めかしたので、彼らの方が先手を打つたのではないか。そうでなければ、晩秋も近づくこの時期に人事など打つまい。

国元に帰れたものの、右筆方参与は聞きしにまさる「閑職」だった。妻女は喜んでくれたが、「このままでは身より心がもたぬ」。やがて隠居を願い出た。「まんま、取り巻きの術中にはまったか」。だが老いばれ呼ばわりされるにはまだ若い。春の陽がゆつくり傾きかけている。「日残りにて昏るるに未だ遠し」、清左衛門は独り呟いた。

◇ ◇ ◇  
戯れに時代小説の文体を借りてパステイ・シユを書いたが、意外に楽しく筆が運んで自分でも驚いた。むしろ現代小説の文体より緊迫感が漂い、物語に深く入り込める。藤沢周平の根強い人気がよく分かった。

# 帆、あげっぱなし日記

鳥居 貴彦

(開風社待賢ブックセンター)

店の入り口のところで入江さんがなにか言いたそうに立っている。眺めていると「この店にはロックが足りないんですよ」と言い出した。とりあえずふんふんと聞いていると「それでね、ロックとロックンロールはカニとカニカマぐらい違うの。詳しいことは小西さんに聞いたらいと思うなあ。じゃ、また来ます」と言いのこして帰って行った。カニとカニカマ。冬に鍋に入っているか、夏に冷やし中華にのっているかの違いくらいしか思い浮かばない。ロックは冬でロックンロールは夏ってことか。なるほど、と思いかけるがやっぱりわからん。小西さんはわかるんだろうか。なんじゃそら、と言って笑う小西さんは容易に想像できる。ああそれはね、と語り始める小西さんもまあわかる。入江さんと小西さんが話しているところは想像がつかない。

「中動態」についての話を聞く。というかいろんな話を聞いた後に「中動態」という言葉が妙に耳に残った。能動でもなく受動でもなく、中動。ヨットはそれだけでは動かない、という話。どんなに腕のいい乗組員がピカピカの船にマストをたてても、海にでて風を受けなければ前には進まない。風がなければ漂うことしかできないし、ただ風を受けているだけではどんな風下に押し流されるだけ。帆と舵をコントロールして行きたい方へ船を操る。どちらが欠けてもだめ。人間が動かしているとも言えるし、風に動かされているとも言える。能動でもあつて受動でもあるのかもしれない。どっちでもいいのだが帆をあげないと始まらないな、と思う。風が吹き始めてから慌てて帆を上げていてはもう遅い。遅くてもいいんだけど慌てちゃうのはまずいよね。知らんけど。風は常に動いている。帆を上げて待つこと。中動であること、あり続けること。でも、帆を上げている人のところに風が吹く、とは限らない。

春の風は強い。道路に置かれたプラスチックゴミの袋がどンドン飛ばされて転がっていく。なぜなら今日は金曜日だから。マンションの前のゴミ袋も、ライブハウスの前のゴミ袋も飛んでいく。ゴミ収集車はまだこない。歓声を



挙げながらゴミ袋を追いかける子どもたちと、ため息まじりの大人たち。

本棚が船で本が帆だったら、ハタキはなんだ。舵はどこにある。

「またもや遠くから「営業自粛」という言葉が聞こえてくる。店を開けていなければ人はこない。人は風だ、と思う。風を受ける準備がなければ風を受けることはできない。人はどうしたら受け止められるのだろうか。店の前をそよそよと流れていく人を見ている。ザルの目をいとも簡単にめぐり抜けていく風。この店にはスキマが多すぎる。「あ、呪術廻戦ファンブック置いてあるでー」と中学生が立ち止まり、指さして声をあげる。「でも今お金ないわ」。風は受け止めるものではなく受け流すものかもしれないな、と思う。全部受け止めちゃうとひっくり返っちゃうからね。

どこかからピンポンという音が聞こえてくる。聞き流していたが、気付いたら一日中なっている。十分おきくらいにピンポン。はじめは前に並べている雑誌の付録が箱の中で鳴り出したのかと思った。でもドラえもん箱を振ってみてもなんの反応もない。隣の家の呼び出しのチャイム

が壊れたのか。それもどうも違う。雨が弱まって外に出ると、ガレージの前を人が通るたびにセンサーが反応して音が鳴っていた。ついでにライトも光っている。「今行って帰ってきただけで四回もなったのよ」「道の反対側通っても反応してるで」「故障でこんなことになるか?」というんな人が勝手に検証を始めた。家主はまだ帰ってこない。車を通っても、自転車を通ってもピンポン。幼稚園帰りの子どもが何度も家の前をうろろうろして何回も音を鳴らし親に「やめなさい」と怒られている。人が通るたびに音がるので、意外と人が歩いていることがわかる。わかったところで何もおこらない。ピンポンと間抜けな音だけが響いている。

# 本の差し入れ

吉田 海将

(朝日新聞総合サービス)

3回目の緊急事態宣言、そして延長。高一の次男が通う京都の高校でも5月に感染者が出たため、一時、全面的にオンライン授業となった。次男が入っているサッカーチームの寮も、散歩や買い物を除き「外出禁止」に。この監禁生活を有効利用してもらうには読書しか無い、と考え、5月にゆうパックで2度、本の差し入れをした。

きっかけは、心身ともに次男の状況があまり良くないためだった。ほとんどのスポーツは、高校年代では3年までの全学年でレギュラー争いをする傾向が強くなり、ハイレベルの練習や試合に伴うストレスが多いようだ。また、5月下旬には右足の指の骨にひびが入るけがをおい、最長で1ヶ月は練習を休まざるを得なくなった。

そんな次男にアドバイスをしてくれたのが、指導者の元日本代表選手。名前は伏せるが、自らも大学入学後、入部したサッカー部になじめず、すぐに退部届けを出したが、周囲の配慮により部に戻る事ができたという。「この3

年間は頑張ってみなさい」と励まされたという。

実を言うと、私はこの指導者本人を2回見たことがある。通っていた大学の教員をしていた際に、体育の授業で、グラウンドで見かけたことがあった。2度目は記者になってから。沖繩のクラブチームの監督をしていた際に、試合後に話を聞いたことがあった。次男の指導をしてもらい、人生は不思議だな、と感じた。

アドバイスで彼は、3歳で両手両足を切断しながらも力強く生き抜き、ヘレン・ケラーとも面会した中村久子(1897〜1968)の生涯にもふれたという。最初の差し入れには、この指導者と中村久子の自伝を含めた4冊を送った。指導者の自伝には予想通り、大学時代のエピソードが盛り込まれていた。

■コロナ禍に「心を整える。」

2回目の差し入れは、5月に発売された元日本代表主将の長谷部誠を特集した「ナンバー」がきっかけだった。三十七歳。選手生活の終盤にさしかかりながらも、ブンデスリーガの強豪、フランクフルトで中心選手であり続ける秘密に迫っている。

フランクフルトの育成アカデミーでは、長谷部のプレーの映像を選手たちに繰り返し見せているという。担当の

監督は「特にお手本となるのが、次のプレーに向けての準備だよ」と語り、「フクロウのように首をふりながら360度すべての空間を瞬時にスキャンできる」と讚える。

同じくブンデスリーガで活躍した内田篤人と岡崎慎司の対談は、代表チームでのエピソードがふんだんに語られている。2018年のロシアワールドカップで長谷部は代表を引退した。世界中のほとんどの選手が代表引退後に、パフォーマンスが衰えていくのに、なぜ、長谷部は進化し続けることができるのか。岡崎は「もしかしたら今、ハセさんは代表とかキャプテンから退いて、本当に自分のサッカーだけを追い求めているのかも。だから楽しんでるんだなっと思うし、そういう意味でもすごい人ですね。」とその理由を推測している。

この発言を読んで、2011年に出版された長谷部の「心を整える。」を読み返してみた。こんな一節があった。「僕には今後のサッカー人生のなかで、絶対にやり遂げたいことがある。それが何かは、実現するまでは秘密にさせてほしい。誰にも言わないつもりだ。」

長谷部の「夢」はまだ実現していないのだろうか。

この本の第一章の第一節は「意識して心を鎮める時間を作る。」だ。ドイツに移籍してから、一日の最後に必ず一人になる時間をつくるようになったという。「目を開けた

まま、天井を見つめるようにして、息を整えながら全身の力を抜いていく」という。

長谷部のこのような試みをヒントに、私はここ数ヶ月、朝起きる際に少し工夫をしている。少し早起きして、白湯を少し飲んでから、三十分ほど、できる限り何も考えない時間をベッドの中で過ごす。近くに林があり、季節により様々な鳥が飛んでくるので、ひたすらその鳴き声に耳をすましている。そうした後に朝食をとるようにすると、出勤するころには心も体も調子が良いときが多い気がする。

途中から長谷部ワールドにどっぷりだが、2回目の差し入れはこの2冊のほか、星野道夫の「旅をする木」と6月に開幕するサッカーのヨーロッパ選手権の展望を特集した雑誌も送った。

中村久子「こころの手足―中村久子自伝」(春秋社)

Sports Graphic Number 1026号 「長谷部誠は知っている―欧州で輝き続ける37歳のサバイバル術―」(文藝春秋)

長谷部誠「心を整える。勝利をたぐり寄せるための56の習慣」(幻冬舎)

# ケアとセラピーをめぐる III

松田 裕史

(高校教員)

宇佐美りんの『推し、燃ゆ』を読んだ。芥川賞であれ直木賞であれ、ベストセラーはほとんど読むことはない。(と言いつつ、目の前に『人新世の「資本論」』が転がっていることを指摘されるところの音も出ないが、人文学の新必読書だと思うのでご容赦願いたい。また、本書の中で昨今流行りのSDGsが指弾されているので教育の視点から読む価値もあるだろう。実際にあった。) 例えば、五年前や一

〇年前の芥川賞は今でも読まれているだろうか。作品名さえ思い出せないし、すでに文壇から身を引いている作家もいることだろう。その点、古井由吉『杏子・妻隠』、大江健三郎『飼育』、中上健次『岬』などは今でも文学批評の俎上に載せられていることに驚嘆する。

『推し、燃ゆ』はあらずじけだど「女子高生」「推しアイドル」「事件」「スマホ」「ファンクラブ」などだけで事足りてしまうので猶更読む気が失せる。しかし、選考

委員の島田雅彦や松浦寿輝が高評価を与えていて気になってはおり、また、お世話になっている(文学的教養の高い)先生が第一作の『かか』とともに「推し」ていらっしやったので3月に読むことにした。

様々な読み方ができる作品だと思うが、僕はケアとセラピーの物語として読んだ。東畑開人は『居るのはつらいよケアとセラピー』についての覚書」のなかでセラピーとケアについてキーワードをリスト化してまとめている。そのなかのいくつかは次のようになる。セラピーは「傷に向き合う・やらせる・介入する・閉鎖・成長・事件・非日常・能動態」、それに対応するケアは「傷つけない・やってあげる・支える・開放・安全・平和・日常・中動態」となる。これらのキーワードを眺めているだけでも『推し、燃ゆ』の多くの場面を想起することができる。

まず、物語の中盤に保健室の場面がある。これ自体は話の展開上さして重要でないようにみえるが、セラピー思考を描いている点で外せないかもしれない。不登校になっている主人公のあかりに対して担任は留年や退学のことについて問いただす。そして勉強が「どうしてできないと思う?」とあかりに問う。あかりは「喉がおしつぶされるような気がして、「どうしてできないなんて、あたしのほうが聞きたい」。担任は畳みかけるように「でも卒業はしたほ

うがいいよ、あと少しは全力でやったほうがいい。これから先のことを考えても」と説得にかかる。まさにセラピー的対応だが、あかりはますます混乱する。

あかりの母親と父親の接し方もセラピー的だ。「父は理路整然と、解決に向かつてしゃべる。明快に、冷静に、様々なことを難なくこなせる人特有のほほえみさえ浮かべて、しゃべる。父や、他の大人たちが言うことは、すべてわかり切っていることで、あたしがすでに何度も自分に問いかけたことだった。」学校でも家庭でも、解決に向けたセラピーが幅を利かせている。東畑の言葉を借りれば、「ただ、いる、だけ」で居たいあかりと、それを許さない家族、学校、社会。まさに、「居るのはつらいよ」状態。

物語を読み進めて終盤に差しかかると、宇佐美りんほどのように話を終わらせるのか、中途半端に終わりはしないかと不安になった。あらずじとしてはよくある話であるから結末がどうしても気になる。だが、そこは選考委員を唸らせただけあってさすがだった。推しアイドルがファンを殴った事件を引き金に、あかりの中で枯渇していたエネルギーが充満してくる。「肉の戦慄きにしたがって、あたしはあたしを壊そうと」するまで生のエネルギーが噴出する。目のまえにある綿棒のケースを破壊するに至って、あかりは覚醒し、生きる姿勢を見出す。起死回生の反転、鮮やか

な切り返し。あかりはケアの世界とセラピーの世界をたくましく往還していくことだろう。読み手としても生を肯定される気になる。

東畑はまた、キティの「ドゥーリア」という概念を紹介している。それはケアする人をケアするものや人のことだ。東畑にとつてのドゥーリアが臨床心理学だったように、あかりにとつてのドゥーリアはアイドルだったにちがいない。しかし、アイドルにとつてはファンがドゥーリアであるとも言える。東畑曰く、「ケアしつづけるために、ケアする人は多くのものに支えられることを必要とする。」「ケアする／される」は対称的な関係ではないだろうし、「ケアする／される」を包み込む「ケア」も必要だ。コロナ禍で過酷な勤務を強いられている医療従事者などのエッセンシャルワーカーのドゥーリアは何なのか、ケアのケアはどこにあるのか。翻って、僕は誰かのドゥーリアになり得ているのか。問がぐるぐると体中を駆け廻る。

## 学びは伝染する ～学び祭生徒感想一覽～

芝野 浩貴

(地球探究家)

「学校に学びがあるとは限らない」のは、外資に汚染され、日本人が日本人を救えなくなった今を見れば納得するだろう。コロナ対応にみる科学技術力の低下しかり。(もちろん含政治力)

かといって STEAM を推奨するわけではない。音信不通 55号から特に授業についてコメントを続けているが、今の社会を学校で例えたときに私が定義しているのは、  
[教頭]・・自分の所属する学校内の誰が不在となってもその代わりに相当する授業ができる人

[校長]・・自分の学校以外のどの学校(所属都道府県内)でも授業ができる人

[教育長]・・自分の所属する都道府県以外のどの都道府県の学校でも授業ができる人

「」をつけているので比喻ではあるが、多くの国際会議で世界各国の若者の勉強する姿勢を見続けた実感として、日本との比較も含めて学びの追跡をしてみると日本

識は世界の非常識Vになってしまったことは明言しておく。以下は 57号で預言した流れの中、実際に「学び祭」に参加した、今を生きる高校生の生の感想である。「学びのあるところが学校」だと私は思っている。

①聴講低学年生徒の感想(新生入生は入学後3日しか登校していない時点で学び祭は開催)

○統計によって因果関係があるかのように推測される疑似相関があると知り驚きました。

○死の感覚が曖昧で、話すことがタブー視されていることが生への感謝を忘れる原因になっているのではないか。

○資本主義の限界の理由が原初的負債の軽視だという意見に賛成です。

○3年生との学力差を他人事のように思っていたが、発表を聞いてゾクゾクした。全教科頑張るだけでなく、3年生のようにどんな問題が出てても対応できるようにになりたい。

○生命とはどんなものなのか科学的に考えたことがなかった。新鮮だった。

○それぞれの学びからこれからの生活に繋げていくと言われて学びの見方が変わった。どの先輩も AI との共存に触れられていた。

○学び祭に参加して自分の知識のなさを痛感。

○天然知能もオトポイエーシスも含んだ新しいオトポイエーシスを作りたい。

○今回の学び祭での脳の使い方を忘れずに、主体的・対話的・深い学びを心がけたい。

○量子論の話の時、いくつも心踊る場面があり、発表が進むにつれてどんどん惹かれていった。

○レンマという言葉は聞いたことがなかったので楽しみにしていて、発表後には更に気になった。

○突然質問されても、どの先輩もきちんと返答されていたので、よほど準備されたのだと感じた。

○調べた事をみんなで共有する事で全員が幅広い知識を得ていくのが素晴らしいと感動した。

○すごく頭を使い、すごく勉強した。「弱さの再構築」が気になった。

○内容は理解できないが、何かひとつのことでも突き詰めれば色んなことが見えてくることがわかった。根元が全て繋がっていた。

○わからずに曖昧な部分やもっと知りたい部分を探究すると自分を成長させているのだと思った。

○結果が悪かったとしても、それから何が自分にとつて大切なのか、自分と向き合う時間を大切にしたいと思った。

○学び祭をして気がついたのは、全然関係ないと思ってた

分野が深めていくと繋がっていたということです。

○上級生の質疑応答では、自分の知らない単語が飛び交っていて、もっと色んな本に触れたいと思った。

○どの先輩も話を深く掘り下げていて、これが探究なのかと思った。力の差を見せつけられた。

②発表者(2021年度3年生)の感想

○さまざまな勉強や世の中の出来事には繋がりがあることがわかり、他の人の発表を通して気がついたことも共有していききたい。

○学び祭のために、多くの本を読み、先生方と話ができ、レジメ作成で頭を悩ませ、発表練習を見て、テーマが違うのに繋がりがあつて驚いた。他の人の発表も自分とどう繋がるのか楽しめた。質疑応答では学年を越えて繋がっているのがわかった。

○オトポイエーシスや繋がりを意識して聴いていると、改めて各発表者の大切さがわかった。全学年が質疑応答に参加して学びが伝染したと思う。

○正直言って、初めは勉強時間は減るし、学び祭の発表する力はないし嫌だった。しかし取り組む中で自信はついて、発表との会話も増え、多くの本を読む中で自信はついて、発表に関してもわかりやすかったと多くの人から言われた。しかし、わかりやすいというのは内容が薄くて理解しやすい

ことだと捉えており、実際他の人の発表のレジメのまとめ方や情報量などレベルの高さを痛感して、そうなりたいたいと素直に思った。

○他の人の発表を聞くのは面白かった。一生懸命調べた本人が、伝えたい事を必死に話すので

面白さが伝わるのだと思った。

○原稿が頭に完璧に入っていたので、聴衆に伝えることだけに集中できた。疑問が出てくるたびにワクワクして、本を読んで知識を得る面白さや、その知識を使って対話することの楽しさを知れた。他の人の発表に関しての本ももっと読みたい。

〔生徒〕・・自分の周りの身近な人間に授業できる人

25名の発表者の背後には数百冊の本が隠れています。それが「本の力」でしょう。



# 小川軒と市勘の思い出 上

古賀 啓三

(米国ミシガン州隠棲)

中学、高校と渋谷区猿樂町に住んだのだが、近所の代官山に小川軒という洋食屋さん和市勘という鮭屋が隣り合わせに在り、その徒歩で行ける立地の便利さもあつてか、父はことあるごとにこの二軒を使い回した。

酔つても歩いて帰れるという安心から、接待や、部下への劳いなどにも使つていたようだし、家族で、ちよつと旨いものでも食おうや、というところの二軒の内どちらかである確率が高かつた。

並木通りの電話局、と今は呼ばないと思うが、から道を挟んで対面に並んで所在していた。(小川軒はまだそこに在る、と思う)

というところ、家族でつつかけを履いて通つたかのような印象を与えるかもしれないが、どちらも名店で、特に小川軒

の方は当時三代目の由緒ある老舗である。

ま、しかし、物理的に、我が家からは徒歩二分くらいであつたので、我々はつつかけは履かぬものの、やはり近所という気安さはある、店の方でもそのような、やや緩い対応をしてくれていて、梅酢が好きで料理にもよく使う、というオーナー・シェフに、母が自分で漬けた梅干しの梅酢を持参し、差し上げたりしていた。

客層としても、我々はやや異色な客であつたと思う。

父は有能なビジネスマンであつたらしいが(技術者上がりだが、引退時は中堅ゼネコンの副社長であつた)、三十半ば過ぎて東京に転勤して来た者の朴訥さを払拭することができなかつた。

そういう飾り気のなさを、両店の店主たちも、日頃神経を尖らせて接しなればならない、肩肘張つたパトロン達とは一線を画し、好ましく思つてくれていた節がある。

つまり、我々以外の客は、洗練された富裕層の人達であつたのである。

小川軒では、家族で行く際は父は厨房の見えるカウンター席を好んだ。

十人くらい料理人が無言で肅々と調理している。

地方の名店の子弟を修行で預かっているケースが多いら

しい。

今は衛生法か何かで出せなくなつたそうだが、当時は頼むと和牛の刺身なんかも出してくれ、晒しを巻いた肉塊を冷凍庫から出して薄切りにするのだが、ほら見てみる、宝物みたいに大事に扱つておられる、と嬉しそうに私にもその視認を促す無邪気な父の笑顔を思い出す。

当時のオーナー・シエフは三代目で、カウンター席に最も近いところにおいて色々指示するは、鮎屋の花板といった風情であつた。

五、六年前お邪魔した際は、恐らくもう七十代後半のシエフがまだお元気で、二十年振りくらいで伺つたのだが、お父さん、小川軒眞員にしていただいたもんね、と覚えておられたのが嬉しかった。

その際、これ息子、パリの修行から戻つたばかり、と四代目のイケメン君を紹介いただいた。

小川軒の主は代々絵の蒐集が趣味で、毎年パリに買い出しに行く。

絵の倉庫として使っている、二階の二十畳程の、常に冷房を利かせた部屋を一度見せていただいた。

本物のマチスやピカソがある。

カウンターの梁に絵が架けられていて、時々取り替える

のだが、褒めると喜ぶ。

一度、まぐれで、これはドーミエの風刺画ですか、と聞くと、よく判つたね、と大層喜んでくれた。

客筋としては、近所に住んでたらしい渥美清とか、野村監督夫妻、長嶋、あと行けば必ずいる、お茶だか活花の家元夫妻、年寄りの爺さんと若くて色っぽい奥さんなんだけど、控えている運転手を夫人が「佐々木！」と呼び付けている様子が芝居じみてコミカルであつた。

市勘から始めれば良かった。

市勘の方が色々エピソードが多いのだが、残り字数が少なくなつてしまった。

この鮎屋は、土建屋の父の会社が施工した、という縁であつた。

腕のいい大将で、私の好みのタイプの鮎、というか、あれで育つたから好きになつたのかもしれないが、小振りでも細長く、カチツとした握りで旨い。

旨いが、昨今の、小洒落たつまみがまず数品出て、握りが数巻、二万円、といった感じではなく、つまみというネタを切ってくれるくらいで、その後鮎、という、極めてぎっかけないのだが、ネタは厳選されており、前述の

如く、握り自体は絶品である。鮪屋では、やはり鮪が主役だと思ふ。鮪で呑んでも旨い。

開店早々から隆盛で、店に入ると左右にカウンターが相形にあつて、それぞれ三人ずつくらい職人が入り、大将は常に左側であつた。

店が開いたばかりの時間に行くと(父は早い時間から食事するのを好んだ。長く呑めるから。これは自分も勤め人となつて、朝の早いサラリーマンにとつては接待するのも、されるのも早い時間に始めてもらうのがありがたいことがわかつた)、職人達が皆、一斉に大根を桂剥きに行っている様子が鮪背で威勢が良かった。

紙数が尽きたので、続きは次号で。

# 八代日記 (十五)

齊藤 仁昭

(元長崎書店)

五月某日

梅雨入りした。例年より二十日ほど早いとのこと。しかし早すぎだ。六月中に梅雨が明けたりするのだろうか。だとしたら夏が長そうだ。憂鬱だ。それとも梅雨が長くなるのだろうか。もつと憂鬱だ。

灰色の空と増水した球磨川を眺めると昨年の豪雨を思い出す。ここ数年は梅雨入りしたと発表された途端に晴れの日が続いていたが今年はしつかり降っている。洪水など起きぬようどうぞならして降ってください。

自分は癖毛なので湿気で髪がくるくるになってしまいから梅雨は嫌いだっただが、短髪にしたことと、年々世間の癖毛への態度も変化しており気にならなくなってきた。以前は直毛の人を羨んだものだけれど、逆に直毛の人に羨ましがられたりもする。

小学校三年生の頃からメガネを掛けていて、中学校くらいまではメガネで馬鹿にされたものだけれど今ではいたるところにメガネ屋があり、時代は変わるものだ。

五月某日

エリック・ロメールのブルーレイボックスが発売されていた。しかしいまひとつボックスやジャケットのデザインに気合いが入っていないような気がする。でも贅沢言っちゃいけない。

映画館に全然行っていない。何より八代には映画館がない。お客さんによく聞くが、以前は駅のすぐ前にあっただらいい。今の八代駅前映画館どころか何にもない。アーケードもさみしいし、若者も見かけない。どうなってしまうのか八代。

駅前と言えば熊本駅前に新しい駅ビルができた。駅に納品があつたついでにのぞいてみたが、あつてもなくてもいいようにしか思えず、関係ないやと退散。

五月某日

最終節にてアトレティコ・マドリリーがラ・リーガ優勝を決めた。素晴らしい。レアルマドリリーもバルセロナも調子が悪かったとは言え、文句なしの充実した内容。堅守を維持しつつ、何よりもスアレスの加入により攻撃のバリエーションが増え、フィニッシュの精度も上がった。スアレスが逆転ゴールを決めた時の控え選手たちの笑顔がチームワークの充実ぶりを表していた。優勝が決まった時のシメオネの笑顔もまたよかった。来年のチャンピオンズリーグではインテルとトーナメントで当たって欲しい。しかしこの試合で降格の決定したバリャドリッドの選手たちの悲しい顔はつらかった…。

ところで家でサッカーを観ようとすると子どもに「サッカーはいや」と泣かれるので早朝か深夜にスマホでハイライトだけ観ている。職場でもサッカーの話をする人がいないのでさみしい。サッカー知ってる風に書いていますが、一人でじっと観ているだけなんです。

五月某日

弟が貸してくれと言うので八代から実家に持って行った『ウオッチメン』を貸す前に再読（小学館集英社プロダクション版）。あまりに素晴らしく、熱中しすぎて読

んだので夜に悪夢を見た…。そして調べてみたら続編が出ているじゃないか。スーパーマンとバットマンも出てくるらしいが、それでいいのだろうか。これは超えられない壁なんじゃないかな。怖くてまだ手を出せない。書店員時代、ウオッチメンは外国文学の棚に並べていた。今も残っていてくれるだろうか。返品されちゃってるかな。

五月某日

あつという間に五月末。もうすぐ氷室祭だ。今年も雪もちが売れますように。

## 実在しない実在の場所

### ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

例えば、ストーリーカーの『ドラキュラ』に、伯爵の居城が出てくる。確かに、ルーマニアには、ドラキュラ（のモデルとなったヴラドⅢ世）が建てた二つの城が実在する。

しかし、作家は、同地を一度も訪れておらず、知友の大学教授から、歴史や民俗、風俗を聞き、この物語を創作した。不気味な城内の佇まいも、真夜中に、馬車で疾駆する、岬々たる岩山、峻険たる渓谷、黒々と深い森、狼の咆哮なども、皆、想像の産物であった。

実際の城は、居城というよりも、砦に近い小振りなものだし、ボルゴ峠も、のどかで平坦な丘である。

例えば、ウォルポールの『オトラント城綺譚』は南イタリアの実在の都市にある中世の城を舞台にした、陰々滅々たる因果話である。

古版本に描かれた挿絵には、堀に囲まれ、四つの塔を持ったゴシック城郭が描かれているが、実在のオトラントの城は、十五世紀に建てられた、対トルコ用の海防要塞である。

市の公式ウェブサイトによれば、「カステッロ・アラゴネーゼ」と言うそうだ。観光ガイドなどには、アラゴネーゼ城と記されているが、アラゴン式城郭、或いはアラゴン風城塞とでも訳すべきではないかと思う。何にせよ、マルティエリの設計はゴシック様式ではなく、小説中の城とは大いに異なる。

著者は若い頃、約二年半をかけて欧州旅行（グラランド・ツアー）をしており、イタリアも北部を中心に滞在、南下してナポリまでは足を伸ばしているものの、半島の反対側にある海沿いの町には立ち寄らなかつたようだ。

オトラントを舞台に定めたのは、地図を見て響きが良いから選んだとも、同地に、よく似た史実が伝わっていたから、ともいう。まあ、シェイクスピアと同様の作法である。

福永武彦の「廢市」は、作中、具体的な地名を明示していないが、北九州の柳川が念頭にあったことは、単行本のあとがきの中でほのめかされている。この作者もまた、同地を訪れていない。

「取材旅行」というエッセーで、「生来おっくうがりで、容易に腰が上らない方だが、楽屋をさらけ出すと、行かないで或る場所を書いた小説が幾つかある」として、同作を例に上げ、執筆は、一冊の「写真集を丹念に見て、そ

れに想像力を混えながら書いた」と告白している。

その写真集とは、田中善徳の『水の構図』のことであろう。昭和十八年にアルスから発行された、北原白秋の故郷・柳川を白秋の詩に即して探訪・撮影したものである。詩人は、病身を押して、序文を寄せた。「この水の柳河こそは、我が詩歌の母體である。この水の構圖、この地相にして、はじめて我が體は生じ、我が詩風は成った。」絶筆であった。

福永はこれを傍らに、かの名作を書いたのであったが、つまり、そこには戦前の、堀川の水を生活の糧としていた時代の柳川が反映されている訳である。

題名も、直接には、白秋の「私の郷里柳河は水郷である。さうして静かな廢市の一つである。」（『思ひ出』）に基づいているに相違ないが、他方で、ダヌンツイオの『廢都』（死都の訳題もあり）を例示している。いささか迂遠で、韜晦気味だが、作者の脳裏には間違いないくローデンバッハの『死都ブリュージュ』があった筈で、仏文の彼が、この作品を知らなかったとは思えない。

全集を丹念に拾ってみると、果たして「死都ブリュージュ」

「ジュ」を読む」という書評があった。

窪田般彌の新訳本を評したものが、この中で、戦前に永井荷風と上田敏の影響でローデンバッハの名を知り、春陽堂文庫で読んだとある。

さらに、荷風が『ブリュージュ』を「すみだ川」の下敷きにしたことを述べた上で、自分が「廢市」を書く時に「ひよつとして似るようなことがあつては困るなど心配した」と述べている。再読したかったが、本が手に入らず断念した、とも。

とまれ、現地取材を敢行していたら、この名作が生まれていただろうか。

雑誌発表は昭和三十四年だが、柳川では、上水道や道路の整備が進み、掘割は生活用水としての本来の機能を失いつつあった。四十年代には、ただのゴミ捨て場、腐臭漂う下水路同然の存在と成り果てていた。

浄化運動が興つたのは、五十年代に入ってからで、その間のいきさつは高畑勲のドキュメンタリー映画「柳川掘割物語」に詳しい。大林宣彦の「廢市」は五十八年公開であるから、きれいになった柳川を描くことができたのである。

## 鳥取あれこれ その五十八

内田克彦（地域研究家）

先日、「日本で最初」となる、鳥取ゆかりの女性たちの一人として、橋浦はるを取り上げて話をした。彼女は、東京での寄宿先である兄の時雄の影響を受け、最初の社会主義女性団体として結成された「赤瀾会（せきらんかい）」の世話人を務め、第二回メーデーに女性として初めて参加した。

橋浦はるについては、牧瀬菊枝著『聞書 ひたむきの女たち 無産運動のかげに』（一九七六年刊）、江刺昭子著『覚めよ女たち 赤瀾会の人びと』（一九八〇年刊）に取り上げられ、地元では竹内道夫著「近代を彩った女性たち①②③」「よみうりローカル鳥取」（一九八五年）や、「鳥取近代文化側面史（四）メーデーで検挙された女性―橋浦はる―」（『地平線 第4号』（一九八八年））により紹介されている。近年では、折井美耶子他編著『オーラル・ヒストリー 橋浦家の女性たち』（二〇一〇年）が刊行され、「橋浦はる小伝」が収録されている。

はるは、一九二一（大正一〇）年五月二日付け『讀賣新聞』に、前日の検束時の写真が名前なしで大きく載った。「ブックデーのとき、道端で社会主義の本を売っていて検束され、象潟へきさがた 署へもっていかれ」たことがあったが、今回は泊められることになった。次いで、同七日付けの「官憲の圧迫化に赤瀾会の苦闘」の見出し記事の中に、「橋浦春子（二二二）」と名前が載り、「社会主義者橋浦俊雄（ママ）」氏の妻である」とあるが、同時に検束された、時雄の妻りくと間違えられている。

はるはその後どうしたのか。『日本女性運動資料集成第1巻』（一九九六年刊）によれば、「赤瀾会主催夏季講習会」が開催された七月一日と同二〇日に参加している。過去の研究書等によると、『聞書』では、「そのあとも（塚）真柄さんたちとちよいちよい、いろんな会合に出ました。電車の中で革命歌をうたっていると、男の人が私の手をひっぱって乱暴しかけてきて、真柄さんに助けてもらった」、「覚めよ」では、「メーデー後はだんだん運動から離れた」と話す一方で「それでもなにかの会合があるときには出たり、ブックデーに本を売るのは参加したりもしていた」、「鳥取側面史」では、「第一線の運動からは退いたものの、時には会合や研究会にも出かけ、ブックデーにも参



加、メンバーとの家族的な交流も続けられた」、『橋浦家の女性たち』では、「メーデー以後もいろいろな会合に出ているが、過激な演説や行動をしてすぐ警察に検挙されるというような運動のやり方に次第に疑問持つようになっていった」と記述されている。

橋浦はるの名前は、『ヨミダス』の検索ではその後は出てこず、『聞蔵』の検索ではそもそも出てこない。「赤嵐会」は、弾圧などにより有力メンバーを失って、秋頃には自然消滅状態となり、翌年三月には新たに結成された「八日会」に引き継がれたが、そこには、はるの名前はない。はるが活動したのは一年にも満たないのである。

翌一九二三年六月、兄時雄が「第一次共産党事件」で禁固一〇か月の投獄中、髪結いとなって生活を支えていた妻りくが発病、はるの懸命な看護にもかかわらず八月三〇日死去、翌々日関東大震災の日が骨上げの日であった。時雄が出獄後、独立を迫られ、「裁縫だけで食べていけるとは思えなかった」こともあり、一九二四年には中川忠雄と結婚し、同年十二月に長女美津、一九二六年には次女輝子を産むが、一九三六年には別居し、一九三八年には、二人の娘を置いて離婚している。

はるのその後を、『橋浦家の女性たち』に基づき「年譜」として書き出してみる。

一九三八年 派出婦となる

一九四〇年 都立の救護院の寮母となる

一九四二年 中国華北交通青年隊の寮母となる

一九四七年 中国から帰国、萩山実務学校(元都立救護院)に再就職

病気の長女美津を引き取り看病する

一九五〇年 長女美津、死去(四月二三日)

一九五五年 肝臓をこわして退職、糖尿病を患い生活保護を受けて療養、裁縫の内職をする

一九六八年(?)時雄宅の敷地に住む

一九六九年 時雄死去(七八歳、二月一〇日)、

時雄妻ひろ死去(六五歳、十一月一六日)

一九七五年 入院先で死去(七六歳、二月二五日)

はるは、結婚後に勧められた金光教を終生信じ続けた。晩年は中野生活協同組合や婦人有権者同盟のことなども手伝っていたという。どんな人生だったと思つて生涯を終えたのだろうか。

# 不条理のメルヒェン 續

武中淳彦 (秦阜梅林 本名)

(楽人)

アンデルセン初期、此の物語には、元ネタがあり其れはスペインの民話だと聞いた。ラストで王さまの裸を指摘し揶揄するのが黒人の小姓だか小間使いでこの役をアンデルセンは子ども、つまりは自分達の未来に繋がる話へと置き換えた由。

## I

今回鳥劇公演で中島演出の光る点の一つに、若者の、外から、つまり観客の視点に近い二つの視点が明示されて居る事が挙げられる。即ち純粹一途で融通の効かない少年ホック、歳上で、シニカルに鳥瞰する能力を保ち、揺れる心で一喜一憂する青年アツプリケ、詩的夢想家肌は共通するけれど磁石のSN二極のように反発する面も併せ持つ：彼らはやがて物語の展開に引き込まれ劇中人物に次々早替えして行く事で観客は否応無く作中に身を置かざるを得な

くなつてゆく。

## II

渋さ知らズさんの演奏は編曲がもう一つの聴きどころ。若い男女二つの華、ピアノ、打楽器の(歌も巧い)玉井さん。サックスの松本さん。一見クールな両者共にアイディアマンでありホックとアツプリケを地で往く情熱と瑞々しい感性の持ち主。

対してインテリのトラムペット北さん、圧倒的実力者でありバンドの顔であるベース(ギター、コントラバス、打楽器)のバンド(ド)マス(ター)不破さん両古参は経験の豊かさや客観性で手綱を締める。

此れ迄、ストラヴィンスキーだったりヴァイルだったり。と大家の作品を編曲する機会の多かつた僕は、一転拙作をアレンジされる…と云う新鮮な機会を與えられた、しかも基本ジャズバンドで有る渋さ…がアドリブ形式で目紛しく形を変容していく事でスリリングな舞台上に瑞々しさを加えてゐる、更にレゲエやロック、タンゴ、クラシック、東洋音楽、民謡…様々なジャンルの音楽が思い思いに持ち込まれ意識、無意識な交響的效果をあげる…抽象的に。拙作に云々云う事は些か我田引水で有り、憚り乍らであるが

山陰の片田舎から、しかもコロナ禍の難しい時期に産声をあげた、此の和製ミュージカル、新しい「古典」となる為に、今後必要なのは観客＝聴衆の声でこそある…

20210504

(寺山修司40回めの命日に)

今回の一枚

G.マーラー 交響曲第二番 ハ短調 「復活」

① J.バルビローリ指揮南西ドイツ放送響、シュトゥットトゥガルト、1970 ライヴ

② 同指揮ベルリンフィルハーモニー、ベルリン 1965 ライヴ

③ Rクベリーク指揮コンサートへボウ管弦楽団他アムステルダム 1960 ライヴ

④ O.クレムペラー指揮Hレッセルマイダン、ヴイーン響他ヴイーン、楽友協会 19510518 ライヴ

⑤ 同指揮J.ベーカー、バイエルン放送合唱団、交響楽団他、ミュンヘン 19650129 ライヴ

⑥ O.フリート指揮ベルリン国立歌劇場管弦楽団他 1924

「裸の王様」公演は後日、有料配信される模様。

詳しくは鳥の劇場 0857-84-326

ウェブ / [www.birdtheatre.org](http://www.birdtheatre.org) 迄



イラスト 秦阜 梅林

## 「嫌悪」の向い方側

— 『メディアと私たち』に寄せて

三浦 永理

(青翔開智中学教員)

五月の読む会では、NHK100分<sup>60</sup>名著シリーズの『メディアと私たち』が課題となった。エドワード・サイードの『イスラム報道』は取り扱われている中の一冊である。サイードは、地理的にも中東と離れているアメリカの報道は、ヨーロッパ諸国の報道とは異なり、より未知の脅威として「イスラム」を捉えていると指摘している。原題は「Covering Islam」。イスラムという概念が覆っているものは果たして何なのか、イスラムについての報道されていること(cover)は何なのか。

私自身は、たまたまカトリックの学校に通い、たまたまイスラム教が中心となっているトルコに交換留学をした。私が初めて中東に興味を持ったのは、大学時代のことだった。パツとしない授業に辟易していた一年生の私は、たまたま興味本位で取ったのが中東情勢に関する授業で

あった。イラン革命前から、イラン研究者を志したという女性教授の授業で、私は同じようにまだ見ぬ国に興味をそらされた。そこで、私は「イスラム嫌悪 (Islamophobia)」という概念を知った。報道の中で勝手にできた嫌悪的なイメージではなく、「自分の目で中東を見るのも面白いかもしれない」という思いつきで、私はイスタンブールの大学に交換留学の申請を出していた。

トルコ語を習うときによく出てくる例文がある。

「Furkiye hem Asya, da hem Avrupa, da.」(トルコはアジアにもヨーロッパにもある。)

アジアとヨーロッパの架け橋を自負するイスタンブールの街は、中東の中でも特異な存在である。「同じアジアの一員だ」とトルコ人に言われる一方で、彼らの言う「アジア」と日本人の背負う「アジア」は異なると感じた。「中東」にグラデーションがあるように。

私がトルコで一瞬でも過(こ)してわかったことは、私達が「中東」と捉える地域の広さである。トルコの近辺は英語では「Near East」と呼ばれることもあり、「近東」とも呼ばれる。つまり、「極東」とは異なり、ヨーロッパに「近い」のである。留学の帰りには、ヨーロッパを貧乏旅行したので、各地の博物館でオスマントルコの襲来などが

描写されている。

サイドも指摘しているように、日本人が想像しているより、欧州と中近東の距離は近い。一方で、それも相まって、彼が想像していたよりも、二〇一〇年代の欧州はイスラムへの憎悪を深めていた。当時はシリア難民の流れもあり、従来から労働者として移住するイスラム教徒への憎悪も高まった。それは近いが故の摩擦でもあった。

二十歳の私が実感したのは、普段日本にいと一括りにできる「中東」が、こうにも多様性に富んでいるという事実である。宗教的指導者が実権を握るイラン、アラビア半島の産油国、世俗主義が成功したかのように見えるトルコ。「Covering Islam」つまり、イスラムの概念に覆われているものは多種多様だ。

知らないゆえに虚像が膨らむ。そんなふうになるくらいなら、自分の目を信じて飛び込まなくてはいけない。(自分の身の安全は考えて。)

私がそんな生き方を志向するようになったのは、無知ゆえの憎悪を超えて他者と出会いたいと感じているからだ。

この休みに「i-新聞記者ドキュメントー」というドキュメンタリーを観た。森達也監督が東京新聞に勤める望

月記者に密着した映画である。

映画を見ると、私たちは知らず知らず主人公に感情移入する。たとえそれがドキュメンタリーであっても。記者の発言が無視されたり、邪険に扱われたりするたびに、私達は悔しくなる、相手が憎らしくなる。しかし、ラストの選挙シーン、私達はその怒りが、自分達が相手と考えている側と鏡になるように、打ち返しあっているだけだと気付かされる。まんまと監督の術中にはまってしまふ。

課題図書の中では、ジョージ・オーウエルの『1984年』も解説されている。「二分間憎悪」という儀式の中で、オセアニアの住民たちは、「テレスクリーン」に映し出される敵に向かって叫び続け、我を忘れる。高橋氏は、インターネットの誹謗中傷を先駆けて表現するようなこの描写に、この作品の先見の明を感じている。目の前のその人ではなく、メディア越しの誰か、イメージに向かって、人間は簡単に憎しみを向けられてしまふ。

『1984年』と初めて出会ったのは、高校の英語の授業であった。今思えばあの時から、私は「憎しみ」と「イメージ」をずっと考えてきたのかもしれない。「イメージ」に捉われずに生きていくには、出会わなくてははいけない。「憎しみ」の向こう側に向かわなくてははいけない。

# みかんの缶詰

あきの素生

(くうねるめがね)



風邪をひいたとき、買ってきてもらいたいもの。

レトルトのおかゆ、ぞうすい。スポーツドリンク。野菜ジュース。推理小説の短編集(できれば文庫本がいい。軽いから)。そして、果物がいっぱい入ったゼリー。大きめのカップで、果物が一種類だけのもの、ナタデココと一緒に入っているもの、フルーツミックス、ヨーグルト味。スーパーに行けば、いつでも数種類のメーカーのものが売られている。でも、子どもの頃は、贈答用以外の果物入りゼリーをあまり見かけなかった気がする。自分で選んで買えるおやつは駄菓子類だけで、ゼリーやプリンで購入権はなかったから、知らなかっただけかもしれないけれども。

その代わりに、風邪のときには果物の缶詰をねだっていた。みかんや桃の缶詰。缶詰は冷蔵庫で冷やしていて、食べるときには、半分くらい(シロップもたっぷり)透明なガラスの容器に入れてもらう。キーキなどを食べるときに使う小さいフオークで、ひとつずつ食べる。桃の場合は、半分

に割られた実をごろごろと器に入れてもらいたい、大きな口でかぶりつく。冷たく甘いみかんや桃が熱を持ったのどをすべっていくのが気持ちよくて、次々食べる。そして、最後に残ったシロップを飲み干す。こうやって缶詰の果物を食べると決まると、「風邪をひくのも悪くないなあ」などと、何やら得した気分になった。(きょうだいが風邪をひいたときもご相伴にあずかれるのだが、その状況を喜ぶほどひどい姉ではなかったつもりだ。確か。おそろく。)

今は、前述のフルーツゼリーがあつて、一回で食べ切るのにちょうどいい量の果物がゼリーとともに冷えているので、もっぱらこちらを食している。風邪をひいたときだけでなく、初夏から夏にかけて、ひとときの涼をもたらすおやつとして、シャーベット系アイスとともにわが家の冷蔵庫に常備される。

フルーツサンドに目がない。特に苺のものが好きで、コンビニなどで見つけると、その日のおやつは決まったも同然だ。真っ白なパンと生クリーム(カスタードより生クリーム派だ)が、ぱりっと洗ったシャツのような清潔さを感じさせる。少しだけ背筋が伸びる。そこに苺の赤が映えて美しいし、苺の丸み分ふくらした姿がいかに幸せな時間間を約束してくれそうだ。実際に口にすれば、苺の酸味

がクリームの甘さやちよつとしたくどさをさっぱりと引き締めてくれるので、最後までおいしくいただくことができ。パン、てどころもいい。スポンジケーキとクリームミたいにお互い甘くて、少しとけあうような味わいではなく、クリームはクリームとして、パンはパンとして合わさっていて、パンに砂糖甘さがない分、クリームの旨さをそのまま感じられるというか。

という具合に、苺のフルーツサンド(苺サンド?)の魅力は尽きないのであるが、家で食べていたフルーツサンドの具は、缶詰のみかん一択だった。何かしらで生クリームが余ったときに作ってもらえる、たまのごちそう。この缶詰のみかんのフルーツサンドが、とても好きだった。苺のように口をさっぱりさせてくれるが、苺ほどくつきりしていない気がする。苺より手軽に買えるというのが、具として選ばれている一番の理由だと承知している。生のみかんだとクリームとけんかしそうだから、ここはやっぱり缶詰のみかんでないといけないが、みかんの周りのシロップやみかん自体の瑞々しさがクリームを少し水っぽくしてしまったりもする。でも、その親しみやすさや隙のある感じもひつくるめて、とても好きなのだ。

普段とは違うけど、「ものすごく特別」ではない。でも、

食べるとうれしくなる。私にとってみかんの缶詰は、そんな役回りのようだ。

とはいえ、気付けば久しく口にしていない。フルーツゼリーもフルーツサンドも、今では簡単に手に入るものな。たまにはみかんの缶詰で「ほんの少し特別」を味わってみてもいいかもしれない。



イラスト あきの素生

# アップルパイ



ドラマメリア

(座敷わらし)

アップルパイが好きだ。

単に好きというより、「思入れがある」と表現してもいい。子どもの頃、忙しいなか母はよくお菓子を作ってくれたが、その中で一番人気を誇ったのがアップルパイだった。当の母親に言わせると「あれは冷凍パイシートさえあれば、あとはそんなに手がかからない。生クリームのケーキよりだいぶ簡単」らしいが、家庭でパイが出てくるという特別感に子ども達はわくわくした。母親がお菓子を作るときには毎度「アップルパイ！」と勢いよくリクエストして呆れられたものだった。そんな思い出のアップルパイは、わたしの心の中の洋菓子部門でいまだに特別な位置を占めている。

さて、そんなAP愛好家たるわたしの最近のお気に入り入り、ローオン『Lichi Cafe』シリーズ『陽まるアップルパイ』。なかなかいいお値段だったが試しに食べてみると、これがもう大変好みで、ハマった。

まずリングが美味しい(最重要ポイント)。ふじりんごが

二分の一個入っているそうで、シャキシャキした果実の食感がたまらない。その自然な甘酸っぱさを生かすように、パイ生地部分も甘すぎず重たすぎず、カスタードとのバランスも絶妙。そして、ほのかなシナモンの香り。あんまり美味しくて、合宿(単語変換中)前は見つけるたびに買っていたし、終わったらまた食べられると指折り数えていたぐらいいだ。

が。しばらく空けているうちに、どうも鳥取のロ○ソ○からは姿を消したらしい。京都に住む姉は「ぎっしり並んでたよ」とレポートしてきたが、これも都会と地方の差か。向こう一〇年分は食べたとは思うが、もう一度味わってさよならしたかった。

少しさみしい。



・編集後記:

くだんのアップルパイ。コンビニ巡りが趣味の知人について見てもらうよう頼みましたが、回った五軒すべてでなかつたようです。目撃情報募集中。      ドラメリア(編集長)

5月5日朝日新聞地域版に定有堂書店が紹介されました。

鳥大医学部広報誌「カニジル」にも。いずれもライターは三宅玲子さん。6月1日には山陰放送「テレポート山陰」。いずれも汽水空港さんとのペア紹介です。      奈良敏行(発行人)